

Shryock, Andrew. 1997. *Nationalism and the Genealogical Imagination: Oral History and Textual Authority in Tribal Jordan*. Berkeley: University of California Press.

(今井 静 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

---

**Yasmin Khan. 2007. *The Great Partition: The Making of India and Pakistan*. New Haven and London: Yale University Press. xxi+251 pp.**

本書は1947年のインド・パキスタン分離独立を、政治エリートよりも民衆に大きな焦点をあてて描こうとする研究書である。著者ヤスミン・ハーンは、1977年にロンドンでインド系イギリス人の家庭に生まれた。彼女は2005年にオックスフォード大学で歴史学の博士号を修得し、2007年からはロンドン大学で政治学の講師として教鞭をとっている。第一作目となる本書は、イギリス王立歴史学協会の2007年グラッドストーン賞を受賞した。

1947年8月、インドとパキスタンは大英帝国から分離独立を遂げた。これまでも歴史家や政治学者らがさまざまな視点からこの出来事を掘り起こし、多数の研究書や論文が発表されてきた。邦訳された著作の中では、たとえば、フランスのジャーナリスト、ドミニク・ラピエールとラリー・コリンズの『今夜、自由を』(1977)が、この歴史的な一大イベントを知る上で欠かせない入門書となっている。この本はドキュメンタリーの体裁をとっているものの、その綿密な現地調査と膨大な資料を駆使した記述により、研究者からも定評を得ている。非暴力を唱え続けた「インドの父」M. K. ガンディーに関しては、評伝や思想分析などさまざまな研究蓄積がある。また、パキスタンの独立については、アメリカの政治学者アーイシャ・ジャラルが『パキスタン独立』(1999)の中で、全インド・ムスリム連盟を率いたムハンマド・アリー・ジンナーを中心に独立期を描いている。以上はどれも優れた先行研究とされているが、いずれも政治エリートを中心に叙述がなされている。これに対し、近年では民衆の視点から建国の問題を再解釈しようとするサバルタン研究などが進められている。本書もこの新しい研究の中に位置づけられる。

インドとパキスタンの独立は大きな紛争を伴った「分離独立」であったがゆえに、南アジア研究の中でもその評価は大きく分かれており、安易に「客観的な評価」がなしえない。極性化している分離独立をめぐる評価は、おおむね二つの流れに分けることができる。ひとつは、独立以前においてヒンドゥー教徒とムスリムは平和裏に共存していたが、ジンナーやムスリム連盟がムスリムを扇動してパキスタンをつくった、という考え方である。この見方を採る研究は、客観的であろうとする当の研究者の意図に反して、政治家がインドが世俗的で民主化に成功したと主張したい時やヒンドゥー至上主義がムスリムを批判する際の材料として利用されることもある。

このような見方とは反対に、南アジアにおいて脈々と続くイスラームの歴史と固有の文化を強調し、パキスタン建国の必然性を説く流れがある。これは結局のところ、ジンナーが1940年に唱えたヒンドゥーとムスリムは異なる民族である、という二民族論を肯定する議論となる。このような主張はパキスタン国内においては、歴史的必然性を強調するあまり、時に「イスラームが南アジアの地に到達したときから、現代におけるパキスタンの建国に至ることは当然であった」というイデオロギー的な言説をも生んでいる。このように、分離独立の解釈は政治と結びつき、その後のインドおよびパキスタンに対する立場や評価と容易に切り離しえない。

分離独立から既に60年以上がたつにもかかわらず、いまだにこの問題を論じることが難しいのは、分離独立が南アジアの中で歴史として完結していないからであろう。それを示す端的な例をあげるならば、まずカシミールの帰属問題が挙げられる。住民の大半がムスリムであるカシミールは、ヒンドゥーの藩王のもと、帰属が決定しないまま1947年を迎えた。この地をめぐる係争は分離独立直後から始まり、1948年5月には第一次インド・パキスタン戦争に発展した。現在は第三次インド・パキスタン戦争後の1972年7月シムラー協定で調印された実効管理ラインをはさんで両国軍が対峙しており、緊張状態が続いている。インド側もパキスタン側も譲らないのは、この地の帰趨が自国のイデオロギーの正当性を証明する場となっているからである。つまり、ヒンドゥー教徒もムスリムも含めた世俗的な国家を標榜するインドと、南アジアのムスリムのためのホームランドを主張するパキスタンの両国にとって、カシミール問題はまさに建国の理念にかかわっている。直接的な領有問題以外にも、カシミール問題が背景にあつて、2008年11月のムンバイ同時多発テロのような事件で両国の緊張関係が表面化することもある。この事件では、犯人の出自がカシミールであるかどうか直ちに問われた。

また、1947年の分離独立が実は「分離」を完遂し切れなかった経緯も、この問題を語ることを困難にしている。すなわち、今日でもインド国内に多数のムスリムが在住している。分離独立は南アジアのヒンドゥー教徒とムスリムを分け、それぞれ別個の国に集住させるはずであった。それにもかかわらず、現在もインド人の13%程度がムスリムである。すべてのムスリムを糾合すべきとのパキスタンの建国理念ゆえに、パキスタン国内には、このインドに「残存する」ムスリムをいわば裏切り者とみなす考え方もあれば、彼らを取り込むまではパキスタン建国運動が完成しないという議論さえもある。

カシミール問題もインド人ムスリムの問題も分離独立にその端を発しており、分離独立はまだまだ完結していない現代史として、その歴史的解釈も60年以上たった現在でも容易に定まらない。そのように容易に客観的な評価がくだせない主題をめぐる、本書は民衆から分離独立を見る手法を採っている。政治的なエリートに焦点を当てると、独立イデオロギーをめぐる極性化した議論に帰結するためである。著者の手法は、従来の研究が政治的エリートの研究に偏っていたことを是正するだけでなく、極性化した議論を回避して、視野の広い分離独立論を展開するためのきわめて興味深いアプローチであろう。

本書は全10章から構成される。各章は時系列的に配列されており、1945年から50年までの短い期間が焦点となっている。この設定には、それ以前とそれ以後の歴史評価に引きずられないように分離独立期を考察する意図も込められている。

前半の第1章から第6章までは独立直前の時期を扱っている（第1章「戦争の影」、第2章「政権の変化」、第3章「ラージ制度の解体」、第4章「信用の崩壊」、第5章「崩壊から更なる崩壊へ」、第6章「二民族のもつれを解く」）。世界大戦中の英領インドでは、食糧危機や都市部にあふれた農民の貧困やスラム化が進み、民衆の間にたまった鬱憤が分離独立の政治的エネルギーに利用されたことが指摘されている。

後半の第7章から第10章では、独立時の暴力をともなう民衆の大移動と、独立直後の現実について描かれている（第7章「トラックに流れる血」、第8章「らい病の夜明け」、第9章「負の遺産」、第10章「引き離された家族」）。1947年の分離独立は、人類史上最大の民族移動を伴ったといわれており、その数は1千万人超と推計される。主にヒンドゥー教徒とシーク教徒がパキスタン領となる地域からインド領となる地域へ、ムスリムは逆方向に移動をし、それぞれの地で略奪や襲撃

が繰り返された。特に、州内でインドとパキスタンの間の線引きが行われたパンジャブ州とベンガル州では混乱が著しかった。著者は分離独立の歴史には必然的に暴力が伴うことを指摘している。すなわち、これだけの数の人間が、必ずしも自発的ではなく移動をした場合、各地で衝突が起きるのは自明のことであった。実際、各地で虐殺や暴動が起こり、数百万人がその生命を失っている。これらの暴動の原因として、イギリス政府がインド・パキスタンの新政府に十分な引継ぎを行わないまま撤退したことの無責任さが指摘されている。

本書の最大の功績は、政治エリートではなく民衆に主体を置き、民衆にとっての分離独立を立体的に描いていることにある。民衆の多くは国民会議派やムスリム連盟の意図とは関わりなく自分たちの生活を送っていたが、分離独立に際しては多数の犠牲者を出した。さらに、政治エリートたちの駆け引きの結果生まれた新しい国家を引き受け、その国家の市民として生きざるをえなくなった。著者は、分離独立は単にナショナリストたちの闘争の終了地点ではなく、多くの南アジアの人々にとって、新しい国家の市民としての開始地点でもあったと位置づけている。これは非常に正当な評価であり、分離独立自体がその後の紛争に満ちた歴史の始まりであったことを考えると、その歴史を引き受けざるをえない民衆を視座に取り入れたことは重要な貢献と思われる。

本書の中で特に注目したい研究成果は、エリートと民衆をつなぐプリントメディアの存在である。鉄道と印刷機によって、1900年代以降に興隆した多くの宗教組織や政治団体がその主張をより広く発信することが可能となり、これらのコミュニティから擁立された政治家の影響力も増大した。さらに、この時代には書籍や論文などの出版物の発行数が急増し、その影響によって都市部では分離独立への危機感が明らかに変化したという。有力団体は独自の新聞や機関紙を刊行しており、ジンナーは英字日刊紙『ドーン』を、ガンディーは『ハリジャン』という雑誌を創刊した。各政党は印刷物を通して党の情報や自治獲得を鼓舞する詩や行進曲を英領インド各地に広めた。また、独立直前まで争点だった領土の分割および国境線については、何種類もの分割案を示す地図が巷に流布していた。

南アジアの識字率は、現在まで低水準である。1940年代に文字が読めたのは、全体から見ればごく限られた階層であったろう。それにも関わらず、プリントメディアの普及と識字者からそこに書かれたことを聞いて語り合う「口コミ」のネットワークにより、情報は瞬間に広まった。その象徴的な事例として、1946年8月16日の朝刊が挙げられる。これは、ムスリム連盟からムスリム大衆に向けられた「直接行動の日」を呼びかける広告であった。その内容を伝え合ったムスリムたちがヒンドゥー教徒を襲撃し、ヒンドゥー教徒がそれに対する報復を行い、後に「カルカッタの大暴動」と呼ばれる暴動に発展した。インフレや飢饉などの経済危機でたまった鬱憤に火がついたためか、カルカッタでは3日間で4千人以上が死亡し、10万人以上が家を失う大惨事となった。さらに、暴動はインド各地に飛び火し、国内の都市が次々と無政府状態に陥った。

また、パキスタンという国名が最初に考案されたのも、イギリスに留学中の学生らが発行しているパンフレットの中であった。イギリスで印刷されたパンフレットがインドまで届き、さらに数年内に連盟の幹部のみならずインドの大衆にまで広まったという現象は、当時のプリントメディアの影響力と情報の流通ネットワークの強さを実証している。

このように、知識・情報を共有する手段としてのプリントメディアに焦点をあてたことは本書の大きな貢献であり非常に意義深い。惜しむらくは、著者が媒介言語に関する議論を慎重に避けている点であろう。たとえば1946年の新聞広告は英字紙に掲載されたが、識字者の中でも英語が使えるインド人はさらに限定されていた。ムスリム連盟は、アラビア語・ペルシャ語の語彙を多用した

ウルドゥー語をインド・ムスリムの民族語として掲げていた。それに対抗して国民会議派が用いたのは、サンスクリット起源の単語を織り交ぜたヒンディー語である。また、各地域には宗教に関係なくそれぞれの地方言語が根付いており、さらに、帰属政党に関係なくエリートは英語を使用していた。南アジアのプリントメディアを支えるのは、共通語としての英語やヒンディー語、ウルドゥー語の存在とともに、プリントメディアによってもたらされた情報を流通させる多言語的な社会的ネットワークである。その実態をさらに理解するためには、プリントメディアの影響力を状況証拠から論じるだけでなく、南アジア独特の言語社会構造を検討することが不可欠であろう。

本書は、極性化された偏った視点を乗り越え、第三の道から分離独立を描きだすことに関してかなり成功しているといえよう。極性化された二つの立場からの脱却を強く試みるあまり、従来の歴史解釈自体の検討と評価は回避されているが、これは極性化された議論の影響力を避けようとする場合にはやむをえないと言うべきかもしれない。本書で提示されている民衆的な視座を強化し、エリート言説の客体化と再解釈を含めて、独立前後の南アジアで民衆とエリートがどのように生きたのかを動的に解明することは、今後の課題の一つであろう。

### 参考文献

ジャラルール、アーイシャ 1999 (原著 1985) 『パキスタン独立』 (井上あえか訳) 勁草書房。

ドミニク・ラビエール、ラリー・コリンズ 1977 (原著 1975) 『今夜、自由を——インド・パキスタンの独立』 (杉辺利英訳) 早川書房。

(須永 恵美子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

**İsmail Rüşûhî Ankaravî (hazırlayanlar Semih Ceyhan, Mustafa Topatan). 2008. *Mesnevî 'nin Sırrı Dîbâce ve İlk 18 Beyit Şerhi*. İstanbul: Hayykitap. 291 pp.**

### はじめに

本書は、17世紀トルコ・イスタンブルにおけるメヴレヴィー教団のシェイフ、イスマイル・アンカラヴィー (İsmail Ankaravî, 1631年没) についての研究とその作品の現代トルコ語訳である。アンカラヴィーのフルネームは、イスマイル・ブン・アフメド・リュスーヒー・バイラミー・メヴレヴィー・アンカラヴィー (İsmail b. Ahmed Rüşûhî el-Bayramî el-Mevlevî Ankaravî) という。彼はまた、リュスーフ・デデ (Rüşûh Dede) やイスマイル・デデ (İsmail Dede) と呼ばれることもあった。リュスーフは、アラビア語ルーフ (Ar.: *rusûkh*)<sup>1)</sup> に由来しており、「精通していること」という意味であるが、この名は彼自身によってペンネームとして使われた。一方、13世紀のペルシア詩人ルーミー (Pr.: Jalāl al-Dīn Rūmī, 1273年没) の著作『マスナヴィー』に施した注釈の名声ゆえに、同時代人からは、「素晴らしい注釈者」を意味するハズレティ・シャーリフ (Hazret-i Şârih) と呼ばれた。

イスマイル・アンカラヴィーは16世紀後半にアンカラに生まれ、もともとはバイラミー教団とハルワティー教団に属していたが、目の病気を患い、コンヤのルーミーの墓に詣でた。その結果功徳を得たことにより、メヴレヴィー教団の信仰に目ざめ、後年、イスタンブルのガラタ・メヴレヴィー

1) 本稿におけるローマ字転写は、オスマン史研究の慣例に基づき、基本的に現代トルコ語式とするが、必要に応じて、アラビア語・ペルシア語式に転写した。その際、Ar.:... Pr.:... という形で明示した。